

【猪越正直先生】

歯科訪問診療の実際と歯科医師・歯科技工士の連携に関する将来展望

超高齢社会の日本では、今後しばらくは在宅医療の需要が増加し続けるものと考えられ、歯科医療関係者が歯科訪問診療に携わる機会は増えることが予想される。歯科訪問診療を受診する患者は、歯科医院に通院できない状態にあるため、全身疾患が重篤であったり、認知症で意思疎通が取れなかったりと、症例的に対応に注意が必要なケースが非常に多い。特に、多くの全身疾患に罹患し多剤服用等の状況下では、安心・安全に歯科訪問診療を実施することが重要となる。そのためには、口腔内に関する知識だけでなく、全身疾患に関する知識や、薬剤に関する知識も必要不可欠となる。

歯科訪問診療の現場では、保存処置よりも抜歯や義歯製作が多いと感じている。予後不良と考えられる歯を抜歯した後に、患者の口腔内に合わせた補綴装置を製作し、処置の完了後に口腔衛生管理をすることで、患者のQoLの向上に貢献することが可能となると考える。このような背景から、歯科訪問診療でも、歯科技工士の活躍の場は今後増えてくるものと考えられる。

本講演では、歯科訪問診療でのいくつかの症例を供覧し、超高齢社会の歯科訪問診療において知っておくべき全身疾患について解説し、さらに歯科訪問診療の現場における歯科医師と歯科技工士の連携の将来展望について、実際に歯科訪問診療を行っているスタッフと共にお話ししたい。

【青柳三千代先生】

歯科訪問診療と多職種連携—歯科衛生士の立場から

介護保険制度における要介護又は要支援の認定を受けた方の数は、令和元年度で約656万人となっており、毎年増加の一途をたどっています。また、国民の6割以上が自宅での療養を望んでいるという報告もされており、在宅医療の充実や重点化の実現など国による様々な政策が取られています。要介護者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるよう、包括的かつ継続的な在宅医療・介護連携の推進が求められていますが、歯科診療所等もその中の役割であると報告されています。そのため、歯科訪問診療のみで患者さんの抱える問題に対応するのではなく、ケアマネージャーや主治医、看護師、そしてご家族を含めた様々な職種との連携や協力が求められています。

要介護者の口腔内は、義歯不適合やう蝕・歯肉炎などの疼痛による経口摂取困難や口腔衛生不良による誤嚥性肺炎の発症などの様々な問題が起こりやすい状態です。さらに、口腔衛生や機能を管理することはQoLの向上や全身の健康に寄与するという報告もされています。そのため、歯科訪問診療において歯科衛生士は円滑な診療補助や口腔健康

管理だけではなく、患者さんの口腔から全身や心の健康までを観察し、支えることも出来るのではないかと感じております。

本講演では、歯科衛生士という立場から、歯科訪問診療での診療の様子や多職種連携における実際の症例について自身の経験を交えながらお話しできればと思います。

【橋本実里先生】

歯科訪問診療においてコーディネーターの役割

人生100年時代といわれるようになった日本で、独居の高齢者が増えており、どうしても社会から孤立してしまうことも少なくはありません。1人で寂しい思いをされる方などは、お食事を作って食べる事を疎かにしがちです。特に義歯の不適合や口腔内が崩壊している方は、なおさらこのような傾向があるようです。よって、高齢者の口腔内環境を整えることは非常に重要な課題です。特に独居の高齢者に対して、歯科訪問診療は必要なものであると考えています。

歯科訪問診療では患者さん一人ひとりのニーズに合わせた治療を行い、ケアマネジャー様、内科、整形外科等の医療機関、そしてご家族様と連絡を密に取り、診療を進めております。国の指針にも、可能な限り住み慣れた地域に必要な医療や介護サービスを受けつつ、安心して自分らしい生活を実現できる社会を目指すというものがあります。アンケートによると、6割以上の方が自宅で療養をしたいと回答したそうです。このように、今後も歯科訪問診療の需要は増加するものと考えます。

私は歯科訪問診療に、コーディネーターとして携わっています。コーディネーターとしての患者さんへの接し方も非常に重要です。例えば患者さん様の人生や、これまでのご経験を伺い、私たち自身が勉強させて頂く事も多くあります。コーディネーターが、円滑なコミュニケーションを意識することで、歯科医師、歯科衛生士を含めた歯科訪問診療チームの診療がスムーズに進むことも多くあると感じております。

本講演では日々の歯科訪問診療にて、コーディネーターの立場からどのように患者さんやご家族と接し、他職種との連携方法といった歯科訪問診療の仕組みと実際を、私の経験を元にお話しさせていただけたらと思います。